

研修先	第18回全国市議会議長会研究フォーラム
日時	2023年 10月25日13時00分 ~ 26日12時00分
場所	西日本総合展示場 新館
テーマ	統一地方選挙の検証と地方議会の課題
(講師)	片山善博 大正大学教授 他多数
概要	<p>I 基調講演 テーマ「躍動的でワクワクする市議会に」</p> <p style="text-align: right;">講師 片山善博さん（大正大学教授・地域構想研究所所長）</p> <p>(1) 地方議会をめぐる現状とこれまでの地方議会を検証する 地方自治二元代表制の一方を担う議会は、地域にとってきわめて大事なことを議決している。しかし一方で現在の市町村議会が持つ課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ なり手不足 ・ 投票率低下 ・ 無投票当選 ・ 定員割れ <p>の結果、多様性の欠如に陥り地域の現状が反映しづらくなりつつある市町村議会が増えている。</p> <p>(2) 日本の地方議会に欠けていることは何か</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 公開の場である議場での真剣な議論がない (例) 予算案が議会を経て変わったことがない。 ・ 公開の場である議場での税の議論がない (例) 学校の校舎が老朽化、でも予算がないから数年待たせる…ありえない！ 議会は固定資産税を増税して財源確保できる。できないと思っていないか？ ・ 住民の声が聞こえない、聞こうとしていない <p>(3) 現行の議会の権限を活用してもっと積極的にとりくむべきこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 執行部の提案を鵜呑みにしない、裏をとる、反対派の意見を議場や委員会で直接議員が聞く…ウソはつかないが上手に本質をぼかすことはよくある。 ・ 地方議会が今一番とりくむべき課題は「教育」である。教職員足りない問題、教職員の働き方問題、採用試験倍率低下…教育の現場は問題だらけである。次世代を担う子どもたちのことなのに。そしてこの問題はずっと放置され続けている。企業だったらとっくに環境改善にとりくんでいる。しかし各地の教育委員会は文科省を言い訳にしていっこうに改善にとりくまない。さらに改善していない原因の1つに教育委員会が「しゃんとしてない」から。名誉職ではダメ。社外取締役のような責

任や情熱を持ってとりくむ覚悟が必要である。教育委員を任命する際、議場に呼んで話を聞き、質問して決めているか。いいかげんに決めるから日本の教育がダメになっている。ということは任命する市町村議会にこそ責任があると言える。

II パネルディスカッション テーマ「統一地方選挙の検証と地方議会の課題」

コーディネーター 谷 隆徳さん(日本経済新聞編集委員)

パネラー 勢一 智子さん(西南大学法学部教授)

辻 陽さん(近畿大学法学部教授)

濱田 真里さん(女性議員のハラスメント相談センター共同代表)

田中 常郎さん(北九州市議会議長)

(1) 谷 隆徳さんから 統一地方選を振り返る

- ・自民 都道府県議選で過半数を維持、維新が議席倍増、立民、共産低迷
- ・投票率低下傾向
- ・女性議員の増加 道府県議会 当選者 316 名 全体の 14% (前回 10.4%)
市議会 当選者 1457 人 全体の 22% (前回 18.4%)
町村議会 当選者 632 人 全体の 15.4% (前回 12.3%)
- ・依然として無投票当選多く 21 市町村で定数割れ
道府県議会 565 名 全体の 25%
市議会 237 人 全体の 3.6%
町村議会 1250 人 全体の 30.3%
- ・杉並区の選挙管理委員会 若い世代の投票率向上への取組紹介

(2) 勢一 智子さんから 「統一地方選挙の検証と地方議会の課題」

- ・人口減少社会の本格的到来が地域にもたらすもの
2040 年団塊ジュニア世代、人口の 3 分の 1 が高齢者となる
- ・地域社会の「鏡」としての地方議会や住民自治の危機が考えられる
若い世代の投票率が低い、無投票が増える、投票率は年々低下
- ・第 33 次地方制度調査会「多様な人材が参画し住民に開かれた地方議会の実現に向けた対応方策に関する答申」2022 年 12 月 28 日
- ・地方自治法改正(2023 年)の意義・役割を明確化した
89 条 住民が選挙した議員をもって組織される議会を置く
2 重要な意思決定に関する事件を議決し、検査、調査、その他の権限を行使
3 議員は、住民の負託を受け、誠実にその職務を行わなければならない
- ・地方議員の概況(特に、町村議会において、専業、女性、若者が少なくなる)
- ・重要なことは、地域の将来像をどう描くか
- ・選択基準は、地域の持続可能性・こころ豊かな暮らし
- ・そのためには、若年世代、将来世代を含む多様な主体参画が必要
- ・多様な人材の議会参画 立候補環境と議会環境の整備、モチベーション

(3) 辻 陽さんから 多様な地方議会(人口 370 万人~1 万人、議員報酬)

- ・なり手不足問題における小規模自治体の課題は、兼業しないと生活できない
- ・なり手不足問題における大規模自治体の課題は、

大選区制のより少票数で当選可能。ワンイシューでも当選しやすい。
政令市では、行政区ごとの中選挙区制、政党化する傾向
政務活動費により現職優位になりやすい

- (4) 濱田 真里さんから 「ハラスメントの実態から考える」
- ・ 地方議員に対するハラスメントの現状 男性 58% 女性 65.5%
 - ・ 性的、暴力的な言葉、プライベートや侮辱的な態度や発言、SNS、身体的
 - ・ 2021年6月「政治分野における男女共同参画の推進法」
 - ・ 有効な対策は、相談窓口の設置、研修、監視機関の設置
 - ・ ハラスメントに関する条例 2023年9月で32条例
 - ・ 女性議員に対するハラスメント相談センター 7件（党内・会派内4件）
 - ・ 相談体制や議会内のルールづくりが重要
- (5) 田仲 常郎さんから 「北九州市議会の取り組み」
- ・ カフェトーク 市民側パネリストと議員で
 - ・ ドリームサミット 中学生議会
 - ・ 平和のまちスタディーツアー 議会棟視察
 - ・ 議員立法 子ども基本条例検討会（開催中）
- (6) 意見交換
- ・ 市民の意見を聞く機会としてカフェトーク、子育て世代や地元大学生からも
 - ・ 主権者教育が重要（18歳投票に向けて、小中から必要）
 - ・ ハラスメント相談窓口は、第三者機関に（東京都狛江市の例）
 - ・ 小規模自治体の場合、首長の権限が強い、対策として市町村間事務局の連携
 - ・ 女性、若者の立候補の困難：選挙期間中手伝ってくれる人がいない

Ⅲ 課題討議

『統一地方選挙の検証と地方議会の課題—議員の成り手不足問題への取り組み—』

コーディネーター 江藤 俊昭 大正大学社会共生学部公共政策学科教授

事例報告者 辻 弘之 登別市議会議員

たぞえ 麻友 一般社団法人WOMAN SHIFT 理事（目黒区議会議員）

永野 慶一郎 枕崎市議会議員

1, 江藤 俊昭氏からの問題提起

<統一地方選挙からみる地方政治の現状>

- ・ 政治の劣化は進んでいる。
- ・ 投票率の低下 一部の例外を除いて過去最低

41道府県議選 41.85%、294市議選 44.26%、373町村議選 55.49%

（前日のパネルディスカッション 谷 隆徳 日本経済新聞編集委員 資料より）

- ・ 無投票当選者率—道府県議会議員選挙 25.0%
- 市長選挙 28.4%
- 区長選挙 9.1%
- 市議会議員選挙 3.6%

町村長	56.0%
町村議会議員選挙	30.8%

- ・女性議員当選者率は増加しているがいまだ半数には程遠い。

<議員のなり手不足は住民自治の劣化を招く>

① 政策競争の欠如

地方政治には政策競争が不可欠であるが、無投票はその機会を奪う。

② 有権者意識の危機

議員の4年間の活動の評価ができない。→住民の主権者意識が侵食される。

③ 議会の危機（多様性の欠如）

無投票当選は、性別（男性優位）、年齢（高年齢化）等の偏りを促す。

議会の存在意義は、多様性を踏まえた公開と討論にある。

2, セッション

(1) 辻 弘之登別市議会議長

「地方議会未来への種まき研究会～地方議員養成講座～」の報告

1995年～北海道庁職員と地方議員が集い結集「地方で生きる人たちの幸せ」のために「自らが行動を起こし・改善をする」活動を続けている。

会からの統一選での立候補者60%=30名が立候補→20名が当選

- ・必ずしも報酬が少ないからなり手が減るわけではない。
- ・定数が少ないほど立候補しづらい。

自分たち自身が次世代の地域リーダー、「想い」をもつ人材の発掘に積極的ではないのではないか。人を育て、働き方を変革し、制度を改正する必要がある。

議会改革によって社会のしくみを変える。

(2) たぞえ 麻友 一般社団法人WOMAN SHIFT 理事（目黒区議会議員）

届きづらい女性の声を政治につなぎ、1つずつ実現していくために団体を設立

3つの課題

① そもそもなろうと思わない

- ・住所の公開などプライバシーが侵害されて身の危険を感じる
- ・子育て等との両立が難しそう

② なり方を知らない

- ・選挙のやり方がわからない
- ・仕事をしている、平日手伝ってくれる人がいない

③ なってもやめてしまう

- ・ハラスメントの問題

ママの議員インターンの取組を行っている—原則オンラインの活動

(内容)・自治体行政の仕組みや議員の仕事を学ぶ

- ・イベントを企画し市民課題を解決
- ・自治体のサービスの調査 フィードバック

(3) 永野 慶一郎 枕崎市議会議長

無投票選挙の克服をめざした4年間のあゆみ

枕崎市は人口2万人足らず

	平成27年	平成31年	令和5年
条例定数	14人	14人	12人
立候補者数	15人	14人	14人
投票率	64.12%	無投票	56.52%
女性議員	4名	3名	4名

(県内で女性議員の比率が一番高い)

- ・平成31年は定員割れの懸念もあった
- ・何としても無投票は避けなければならない
- ・立候補しやすい環境づくりが重要
- ・特別委員会1年間で7回開催
- ・市民の声を聴くためにアンケート調査を実施→定数10人が妥当が52%
- ・しかし、定数を減らすと市民の声が届かなくなるのではないか
→議員定数は14人から2人減の「12人」とした。
- ・議会が何をやっているかわからないと“減らせ”となる
→市民と市議会との意見交換会を行う
- ・人材を探し説得しても、家族の反対、家庭の都合等で断念する人もいて、厳しい状況

(4) セッションの感想

「立候補者を探すとあなた自身の落選のおそれが出てくるのではないか、その点はどう考えているのか」との質問に対して、自分が落選する心配よりも多様性のある議会にしたいと、議会の意義を守ることを優先している皆さんの姿勢にととても感心させられた。

所 感

全体テーマの中の「地方議会の課題」について、片山善博さんの講演により課題が明確になった。「なり手不足」「投票率低下」「無投票当選」「定数割れ」…このような地方議会には多様な価値観の共有が滞ってしまう。これらの課題の要因の第1位は有権者の無理解・無関心とのことであった。そうすると次は議会が多様性に基づく公開と論議の場にならなくなり有権者はさらに議会に対し無関心になる。悪循環である。片山さんはその課題を克服するためのキーワードとして「躍動的でワクワクする市議会」を語られた。

大野城市議となり半年が過ぎたが、自分自身疑問に思いながらも「そういうものなんだろう」と思ってきたことのいくつか(例 教育委員の任命が紙上のみで決まっていくな)を片山さんから指摘された。ということは大野城市議会も有権者の無理解・無関心

を招きつつあるのかもしれない。事実、大野城市はこの30年間で投票率が15%近く下落している。市民にそっぽ向かれるより前に「躍動的でワクワクする大野城市議会」になる必要性を強く感じた。

—作成者 河野敏生—

大変有意義な研修会であった。まず、片山善博元鳥取県知事の講演「躍動的でワクワクする市議会に」を聴き、改めて議会・議員の重要性に身が引き締まる思いである。

二元代表制において、決めるのは議会が中心で、市長は執行機関ということ。ところが、議会は市長が決めた施策の追認機関となっている現状も指摘された。そうであるがゆえに、議会への関心も、投票率も低く、悪循環である。

これを変える方策として、現行の議会の権限を活用しもっと積極的に取り組むべきことがある。例えば、住民を委員会に呼び市民の意見を聞き議論すること、執行部や議会自ら住民アンケートを行う、教育長や教育委員など人事案件についても議会に呼び実際に人と考えを知り承認、不承認を検討をすること。大変参考になり大野城市議会においてもぜひ取り組みたい。

パネルディスカッションも大変有意義であった。特に、地方自治法の改正や第33次地方制度調査会「多様な人材が参画し住民に開かれた地方議会の実現に向けた対応方策に関する答申」については更に勉強し、その方向性を参考にしたい。ハラスメント対策についても、第3者機関の相談窓口の必要性を訴えていきたい。

—作成者 松崎百合子—

今回のフォーラムで、議会には大きな権限があり、議会の存在意義は多様性に基づく「公開と討論」、それを経た責任ある議決（決定）であることを学んだ。

そしてまた、市民に議会が何をやっているかわからず、市民も議会に関心を持たず議員には誰がなっても同じだと考えるようになると、定数を減らせとなり、定数を減らせばますます立候補者が減り、多様性が失われていくという悪循環に陥る恐れがあることがわかった。

本市ではまだ今のところ「定数割れ」の心配はないが、投票率は低く、議会に対する市民の関心は薄く一部の固定した市民の中で選挙が行われ、多様な意見が反映されていないと感じている。また、議会の公開も十分ではないと思う。公開制度があるだけではだめで、実際に委員会も含め議会で何が行われているか市民に知ってもらい、興味をもってもらう必要がある。（春日市と比べ一般質問の動画再生回数も格段に少ない。）さらに、議会内の討論（議論）をもっと活発化させる必要があると思う。

議会の権限の大きさを自覚するとともに、議会をもっと「躍動的でワクワクする」魅力的なものにして、次世代を担う若い人たちに関心をもってもらえるよう努力しなければならないと思った。

—作成者 永利恭子—